

1991年6月20日 発行



寄せ蛾記

◎雑木林の衰退と武藏野の蝶

◎埼玉新記録！

ダイミョウヒラタハナバエ

60号



表紙の昆虫

ウスバシロチョウ　　ぽかぽかと暖かい春のある日、優雅に舞い翔ぶウスバシロチョウを見つけました。柔らかく、繊細で今にも破れてしまいそうな姿にも似ず、逞しい生命力を内在しているのでしょうか、近年その分布域を拡大しているといわれています。身近な昆虫達が年々減少して行く中で、こんなニュースを聞くのはとても嬉しいものです。

きり絵・・・・・堤 啓輔

表紙デザイン・・・小堀 文彦

(編集担当より：寄せ蛾記は、本号から表紙のデザインを堤啓輔・小堀文彦の両会員にお願いすることになりました。堤啓輔氏は、高校生だった1983年に、当会が現在使用しているベニシジミをあしらったマークをデザインしたなかなかのセンスの持ち主、今後、毎号違った切り絵で本誌の表紙を飾ってくれる予定です。表紙全体のデザインを担当している小堀文彦氏は、すでに鱗翅学会の『やどりが』の裏表紙にチョウの細密画を描いたり、表紙のデザインを手掛けたりの活躍でおなじみのことと思います。堤一小堀若手コンビによる『寄せ蛾記』の表看板を、これからも、どうぞお楽しみに。)

.....

い る ま 蛾 報 (6)

井 上 寛

.....

1990年から91年は暖冬であった。初冬から早春にかけて成虫が羽化するシャクガ科が、90-91年の暖冬の影響で、いつもの年と出現期が異なっているかどうか、注目してみた。

フユシャク、フユナミシャク、フユエダシャク類については第2報(1988)で、コバネナミシャク類については第3報(1988)で報告したし、第5報(1990)までのデータは、井上・市川, 1990. 加治丘陵環境調査書の中の「加治丘陵の蛾類」に引用されているので、併せて参考にしていただきたい。

クロバネフュシャク *Alsophia foedata* INOUE

1月20日、2月1日と7日にそれぞれ1♂がとれた。1シーズンに3♂という収穫も初めてだし、1月にとれたのも異常である。

クロテンフュシャク *Inurois membranaria* (CHRISTOPH)

1月20日から2月27日までのあいだに、例年通り多数飛来したが、いつもより出始めがおそかった。

ウスバフュシャク *Inurois fletcheri* INOUE

1月7, 9, 11日にそれぞれ1♂がとれただけで、例年よりはるかに数が少なかった。

ウスモンフュシャク *Inurois fumosa* (INOUE)

12月31日から1月22日のあいだに、クロテンフュシャクに次いで数多く飛来し、平年とほとんど同じ状況だった。

ホソウスバフュシャク *Inurois tenuis* BUTLER

3月17日と24日にそれぞれ1♂がとれた。もともと余り多くない種である。

イチモンジフュナミシャク *Operophtera rectipostmediana* INOUE

12月26, 27日と1月11日の3♂のみ。発生期は変わりないが、例年よりはるかに少なかった。

サザナミフュナミシャク *Operophtera japonaria* (LEECH)

12月9日に1♂、15日に3♂が飛来した。一晩に3♂をとったのは初めてのことであるし、12月9日というのは、例年より1週間くらい早い。

クロオビフユナミシャク *Operophtera relegata* PROUT

12月7、14、15日にそれぞれ1♂。例年よりはるかに数が少なく、しかも発生が1週間くらいおそい。

シロフフユエダシャク *Agriopsis leucophaearia dira* (BUTLER)

1月24日から3月中旬まで、毎晩のように多数飛来したが、1988年の暖冬と同様に、異常に早くから羽化が始まった。

クロスジフユエダシャク *Pachyerannis obliquaria* (MOTSCHULSKY)

12月8日と22日にそれぞれ1♂。22日というのは、むしろ例外的におそい。

チャバネフユエダシャク *Erannis golda* DJAKONOV

12月10日から20日にかけて飛来したが、平年より出始めがおそく、数もはるかに少なかった。

シモフリトゲエダシャク *Phigalia sinuosaria* LEECH

2月7日と13日、3月9日にそれぞれ1♂。数は例年より少ないが、発生期は変わっていない。

シタコバネナミシャク *Trichopteryx hemana* (BUTLER)

4月8日から下旬まで、例年通り毎晩のように飛来した。

ウスオビコバネナミシャク *Trichopteryx incerta* YAZAKI

第3報で書いたように、かなりまれな種だが、3月16日、1♀；20日、2♂；21日、3♂；23日、1♂；28日、2♂；30日、2♂、合計11頭も1シーズンにとれたのは異常かもしれない。

クロシタコバネナミシャク *Trichopteryx misera* (BUTLER)

3月28日、1♂；4月7日、2♀；8日、1♀。1シーズンに4頭というのは多いほうである。

ウスベニスジナミシャク *Esakiopteryx volitans* (BUTLER)

3月13日から4月上旬まで、シタコバネナミシャクと同じように、ほとんど毎晩飛來した。

シーズン中に1頭も飛來しなかったフュシャク類とコバネナミシャク類は、シロオビフュシャク *Alsophila japonensis* (WARREN), シロトゲエダシャク *Phigalia verecundaria* LEECH, チャオビコバネナミシャク *Trichopteryx terranea* (BUTLER), ウスミドリコバネナミシャク *Trichopteryx miracula* INOUE, オビコバネナミシャク *Trichopteryx muscigera* (BUTLER), アカモンナミシャク *Trichopterigia costipunctaria* LEECH であった。

このほかに、井上・市川, 1990 が1♀を記録したシロテンカバナミシャク *Eupithecia tripunctaria* HERRICH-SCHIFFER の2頭目の♀が4月14日に飛來した。

同一地点で毎晩のように灯火採集をしていても、その周辺での発生個体数がたまたま多ければ飛來するし、そうでなければ、まったくとれない年もある。比較的個体数の少ない種の場合は、たまたま多い年にめぐり合えばとれるもので、その周期は決して一定していない。クロバネフュシャクやウスオビコバネナミシャクなど、数年置きにしかとれない。

天候、寄生蜂(蠅)、病気、食草の状態など、生態的要因が複雑にからみ合って、年ごとの発生個体数が多かったり、少なかったりするのだろう。

同じように、クヌギやコナラの二次林に住む蛾でも、この地域ではシャクガの仲間の発生量は、割合に安定しているが、マイマイガなどは、かなり不規則だし、ヤマダカレハに至っては、80年代に3年間にわたって大発生したのち、再び「正常」に戻り、入間市では、成虫がめったに見られない「珍種」となってしまった。

(いのうえ ひろし 県358 入間市仏子311-2)

.....

武藏野の雑木林の衰退と蝶の変遷（1）

石塚 祺 法

.....

関東平野一帯に広がっていた武藏野台地はその昔、国木田独歩の『武藏野』で多くの人に知られ、関東地方で生活している人達はなじみの言葉になっている。武藏野は近年の人間の生活の場となり、武藏野台地で生活している人達は恐らく数百万人を越えるであろう。あるいは1千万人を越しているかもしれない。それだけ私達と密着している台地である。

今から100年前、明治時代の初期は東京の本郷、新宿、中野、そして渋谷界隈も武藏野の一角であった。そしてこれらの地域には雑木林がそこここに見られ、のどかな風情であったようだ。国木田独歩の『武藏野』の舞台はそれより外縁の三鷹、吉祥寺周辺であったようで、いわゆる『山手線』の内側は既に武藏野の面影はなく、街に変貌していたようである。昭和の時代になって、さらに街は発展して、武藏野は消滅の一途をたどったのであるが、それでも『戦前』までは吉祥寺、三鷹周辺はまだ広大な武藏野の雑木林が存在していたのである。

武藏野は東京周辺ばかりでなく、その名前のとおり現在の埼玉県が主力である筈であるが、厳密な区分はなく、一般的には埼玉県の南西部の台地を指すようで、それらの地域には現在でも武藏野の地名が残っている。

私が生まれ育ったのは埼玉県の浦和市である。浦和市も武藏野の一角であることは間違いない。明治時代に創立した私の母校(浦和高校)の校歌にも武藏野という歌詞があるので、この一帯が武藏野に含まれていたといえる。埼玉県では、川越、所沢台地、東松山、吉見台地も武藏野の一角であった想像される。とにかく武藏野はこのように広大な地域を包含している台地であつた。

これから私が書こうとしている『武藏野』は埼玉県の南西部の台地(標高50m前後)の雑木林と蝶の変遷がテーマであるが、一人の蝶愛好家の目で見た約40年の変遷の歴史を中心にして考えている。従つて、必ずしも科学的データに基づくものではなく、多分に人間的、感覚的な要素がある事を承知してもらいたいと思う。また、武藏野台地の中でも浦和、大宮台地、川越台地、東松山、吉見丘陵を中心とした地域である事も承知してほしい。それ以外の武藏野台地にも異なったドラマがあると思われるからである。

1940～50年代の武蔵野の蝶

1940～50年代の浦和市はまだ戦後の混乱の時代であった。とても今日では想像もできぬくらい、田舎の匂いに満ちた街であった。

道路には牛や馬車が往来しており、自動車はガソリンではなく、木炭で走る代物であった。今日では想像もできないが、バスの後部に大きな釜を持ち、木炭を燃してそのエネルギーで走るので、もうもうと煙りを出し、のろのろと走るようすは牧歌的であった。道路は殆ど非舗装ででこぼこ道である。今日、日本の田舎でも決して見られない風情である。これが埼玉県の中心都市の浦和市の姿であったのである。

街の中心部がこんな姿であったから、ちょっと中心をはずれれば、至る所に自然是存在していた。武蔵野の雑木林も大きくはないが存在していたのである。私の家は浦和市の駅から歩いて10分足らずの場所にあったが、当時、家の周囲でオオムラサキやミスジチョウの姿も見られたものである。

私が蝶に興味を持ち、蚊帳でこしらえたネットで蝶を追い掛けたのが1948年である。わが家から1キロ程の距離に蓮昌寺があり、その裏山が私の活躍の舞台であった。この裏山は大きな雑木林で蝶の絶好の棲家であった。オオムラサキ、ヒオドリショウ、ルリタテハ、アカタテハ、ミドリシジミ、アカシジミ、ウラナミアカシジミ、ミズイロオナガシジミ、オオミドリシジミ、ジャノメチョウ、コジャノメ、秋には各種ヒョウモン、ツマグロキチョウ、そして1952年にはオナガアゲハも採集した。これらの蝶のうちオオミドリシジミだけは採集できなかったが、少年時代の私にとっては夢多き採集地であった。この場所で全く記録がなかったのがアサマイチモンジとウラゴマダラシジミであった。これらの蝶は浦和市でも稀な蝶で、他の場所でも姿を見ることはなかった。

浦和市の西4キロの所に荒川があり、その河川敷も蝶の宝庫であった。特にオオムラサキは多産し、ヒョウモン類も多く、その他、ミドリシジミが星のごとく舞う素晴らしい場所であった。ここでの私の自慢できる記録は1953年のオオウラギンヒョウモン1♂の完全品の採集であり、その一週間前にミドリヒョウモンも採集している。ミドリヒョウモンはともかく、オオウラギンヒョウモンは今日では幻の蝶であり、私自身でもその後1954年、八ヶ岳で1♂採集したのが総てであり、思いでの蝶である。この河川敷にはギンイチモンジセセリが当時から多産していた。

当時の蝶のリストは残念ながら作成していないが、私の記憶に残っている主力の蝶はつきの通りである。

1950年代の浦和市の蝶

(1) アゲハチョウ科

アゲハチョウ、キアゲハ、クロアゲハ、カラスアゲハ、アオスジアゲハ、オナガアゲハ、モンキアゲハ(偶産蝶;橋本氏採集) ジャコウアゲハ 8種

(2) シロチョウ科

モンシロチョウ, スジグロシロ, ツマグロキチョウ, モンキチョウ, キチョウ, ツマグロキチョウ
ウ 6種

(3) タテハチョウ科

コムラサキ, オオムラサキ, ゴマダラチョウ, イチモンジ, アスマイチモンジ(稀), コミスジ,
ミスジチョウ, キタテハ, アカタテハ, ルリタテハ, ヒメアカタテハ, ヒオドシチョウ, クジャ
クタテハ(1949;八木沢, 1958;石塚採集), ウラギンヒョウモン (1953;石塚), オオウラギンヒョ
ウモン(1953;石塚), ウラギンスジヒョウモン, オオウラギンスジヒョウモン, ミドリヒョウ
モン, メスグロヒョウモン 19種

(4) テングチョウ科

テングチョウ 1種

(5) マダラチョウ科

アサギマダラ (偶産, 1955;石塚)

(6) ジャノメチョウ科

ジャノメチョウ, ヒメウラナミジャノメ, ヒメジャノメ, コジャノメ, ナミヒカゲ, サトキマ
ダラヒカゲ 6種

(7) セセリチョウ科

ミヤマセセリ, ダイミョウセセリ, ギンイチモンジセセリ, キマダラセセリ(私は未採集), イ
チモンジセセリ, オオチャバネセセリ, チャバネセセリ, ミヤマチャバネセセリ, コチャバネ
セセリ 9種

(8) シジミチョウ科

アカシジミ, ウラナミアカシジミ, ウラゴマダラシジミ(稀), ミズイロオナガシジミ, ミドリ
シジミ, オオミドリシジミ(稀), コツバメ(稀), トラフシジミ(稀), ムラサキシジミ?, ベニ
シジミ, クロシジミ(大宮で採集, 原), ゴイシシジミ, ヤマトシジミ, ツバメシジミ, ルリシ
ジミ, シルビアシジミ(荒川に棲息? 矢野), ウラナミシジミ, ウラギンシジミ? 18種

およそ68種が当時の浦和市周辺に棲息していたようである。当時の私が確認できなかった蝶はウラギ
ンシジミ, ウラゴマダラシジミ, コツバメ, トラフシジミ, シルビアシジミ, ムラサキシジミ, クロシ
ジミ, オオミドリシジミ, アスマイチモンジ, キマダラセセリ等の10種である。その他、アオバセセリ
の記録もあるようで、当時の浦和市を中心とする武藏野の雑木林には70種前後の蝶が棲息していたと考
えてよいだろう。

これらの蝶が今日まで無事に棲息しているかどうかがひとつの問題であるが、それよりもこれらの蝶
の棲家である武藏野の雑木林が一体この40年間でどうなったかを検証してみる必要がある。

浦和市周辺の雑木林の変遷

1950年代の浦和市の人口は約10万人程度であった。その後、町村合併があり、浦和市の面積は多少増加したが、今日では約40万人に増加している。人口の増加に伴って、学校、工場、施設等が増加し、武蔵野の雑木林は完全に消滅してしまったのである。荒川の河川敷きもグランド、ゴルフ場等の施設ができ、ここも僅かな地域を残して消滅してしまった。つまり、人間の生活に必要な場所は総て開発されてしまったのである。残された僅かな場所は人間の利用しにくい場所のみであり、それもごく僅かな場所に限られているのが今日の姿である。

私のホームグランドであった浦和市駒場の蓮昌寺の裏山は今日では住宅地に変貌していた。利用可能な遊休雑木林は既に存在していないのである。

1970年代がひとつの契機であったようだ。これは浦和市に限らず、埼玉県西南部全体にいえる事である。いわゆる列島改造論の直撃を受け、多くの雑木林が姿を消したのである。残念ながら私はこの時期は当地にいなかったので、これらの劇的な変貌を体験していない。その間、蝶の変遷も残念ながら知らない。現地の蝶愛好家の話では1960年代の後半にドラスチックな変化があったようで、多くの蝶がその間に姿を消したとの事である。

私が再びこれらの地域の蝶に关心を持ち始めたのは1980年代になってからで、既に、ドラマは終了してしまった後であった。しかし、浦和、大宮周辺のドラマは終了しても武蔵野台地はまだ残されている地域がある筈である。その場所を埼玉県の中央部の東松山、吉見周辺に求めたのである。これらの地域も例外ではなかったが、まだ武蔵野の雑木林の残影はかすかに残っていた。それらの地域と私の少年時代の40年前の浦和市周辺の状態と比較するのは無理ではあるが、武蔵野という広大な台地の雑木林の変遷というテーマは何とかなりそうであったのである。

そこで私が発見したのは、私にとって、衝撃的な事実であった。1950年代の浦和市周辺とはかなり異なったドラマが展開されていたのである。そのドラマは私の一人よがりの創作かもしれないが、極端にいえば、100年前の東京の武蔵野の姿が再現していると私には感じたのである。

私の『こだわり』を明確にすると、現在の東京の姿を100年前に戻して考えてみると、ビルが活立している界隈は誰も想像していないが、丘あり谷ありの地形である。標高は0~50mの範囲の平野である。あるいは丘陵地といえる地形も多々存在する。これらの地域に林を再現させたならば、どういう姿になるかを想定して、それに近い地形を探し、そこに棲息している蝶から100年前の東京の武蔵野の蝶を再現してみたいと考えているのである。従って、標高100m以上の地形は対象外とし、三鷹、吉祥寺及び世田谷とほぼ同じ標高(50~60m)の地形を対象とした。昔、本郷の東大構内でクロヒカゲがいたとかコジャノメが湯島天神にいたとかの噂があり、世田谷では最近までウラゴマダラシジミやクロヒカゲが棲息していたとの話も聞いていたからである。

浦和、大宮台地での蝶の変遷

私の少年時代の浦和周辺の蝶の盛衰について、現在明確な答えは持っていない。従って、記憶と想像による部分が多いが、私の友人である原聖樹君(大宮)の情報も参考にしてみるとおぼろげながら当地の雑木林に棲息していた蝶の盛衰の輪郭が浮かんでくる。勿論、事実と異なる点もあると思われるが、それは別として、推定するとつぎの通りである。

(1) 絶滅したと思われる蝶

オナガアゲハ、ツマグロキショウ、ミスジショウ、ウラギンヒョウモン、オオウラギンヒョウモン、ウラギンスジヒョウモン、ジャノメショウ、コジャノメ、ミヤマセセリ、ウラゴマダラシジミ、オオミドリシジミ、クロシジミ、シルビアシジミ コツバメ 以上 14種

(2) 絶滅に近いか稀になったと思われる蝶

オオムラサキ(荒川以外では絶滅)、ヒオドシショウ(1980年大宮公園で目撃)、メスグロヒョウモン(発生は?)、アカシジミ(稀)、ウラナミアカシジミ(稀)、トラフシジミ(稀)、キマダラセセリ 以上 7種

(3) 偶産蝶

アサギマダラ、クジャクタテハ、モンキアゲハ 以上 3種

(4) 最近増加したと思われる蝶

ウラギンシジミ、アサマイチモンジ 以上 2種

(5) 棲息は確実であるが個体数が減少している蝶

カラスアゲハ、アカタテハ、ルリタテハ、コチャバネセセリ、ミズイロオナガシジミ、コムラサキ、テングショウ、ツマキショウ、ジャコウアゲハ 以上 9種

(6) 局所的に棲息している蝶

ミヤマチャバネセセリ、ギンイチモンジセセリ 以上 2種

(7) 普通にみられる蝶

アゲハ、キアゲハ、クロアゲハ、アオスジアゲハ、モンシロチョウ、スジグロシロ、モンキショウ、キショウ、ゴマダラチョウ、キタテハ、イチモンジショウ、ヒメアカタテハ、ヒメウラナミジャノメ、ヒメジャノメ、ナミヒカゲ、サトキマダラヒカゲ、イチモンジセセリ、オオチャバネセセリ、ミドリシジミ、ベニシジミ、ヤマトシジミ、ルリシジミ、ツバメシジミ、ダイミョウセセリ、ウラナミシジミ 以上 25種

(8) 盛衰がよく分からぬ蝶

ミドリヒョウモン、オオウラギンスジヒョウモン、ムラサキシジミ、ゴイシシジミ 以上 4種

(9) その他の蝶

アオバセセリ, クモガタヒヨウモン, ミヤマシジミ

これら3種の蝶は棲息が未確認の蝶である。

以上が浦和、大宮台地に棲息していたと思われる蝶の盛衰の概略である。勿論、データ不足による誤認はあると思われるが、その確認が今回の目的ではないので、後日、これらは確認したいと考える。これらの蝶のいくつかをテーマに、そしてここに記載していない蝶についても近年演じられたドラマをこれから述べてみたい。

第一部 『失われた平野部の蝶』

その1 『コジャノメ』

今からおよそ40年前、少年時代に住んでいた浦和市駒場の蓮昌寺の裏山でボロボロのコジャノメを採集した記憶がある。しかし、少年時代の曖昧な記憶のため実際のところ定かではない。

コジャノメという蝶は地味で人の興味をひく蝶ではない。標本になるような新鮮な個体であったなら記憶も確かであるが、破損した個体で標本箱にも入れていなかったので、この蝶の事はすっかり忘れていたのである。

1985年頃であったろうか。『タカオ・ゼミナール』という蝶仲間の会合の時、コジャノメが話題になつた事があった。私も昔のことを思い出して、浦和市のコジャノメを話題にしたのであった。仲間達は皆『コジャノメがそんな平地にいるわけがない。遠い日の記憶の間違いではないか』という。そういわれてみると、私も自信がない。あやふやな古い記憶が頼りで何の確証もなかったのである。コジャノメは平地の蝶ではないのかもしれない。武藏野の雑木林には棲息していなかったのだろう。そう思いつつも何か心に引っ掛かるものがあった。

元来、この蝶に全く興味を持っていなかった私だったので、手持ちの標本を調べてみても2~3頭の標本（山梨産）があるだけであった。その後、コジャノメに出会ったのは二度あった。一度は狭山丘陵で、もう一度は東松山市北方の高根カントリーでゴルフをしている時、コジャノメの姿を見ていた。コジャノメを追ってみようと思ったのは、1988年になってからである。今まで無関心であったこの蝶について、平地で生活しているかどうかスポットを私なりに当てて見ようと考えたのである。

市川和夫さんと原聖樹君の共著に『埼玉の蝶』がある。その中でコジャノメについて、次のような記載がある。

『海拔200m前後の丘陵地から800mまでの低山地が主棲息地で国鉄八高線を境にして、そこより東側の低山地では殆ど姿を見せない。上限は1000m位までで、武甲山、棒ノ峰、三峰山等で採集されている。成虫は5月から9月までの間に2回発生する』

たったこれだけの記載である。やはり、コジャノメは関心の薄い蝶なのである。この記載の通りであれば、海拔20mの浦和市に棲息しているわけがない。だが待てよ、私が目撃した高根カントリーは海拔60mで、八高線の東側である。原君がどうゆう理由で八高線の東側で姿を見せないと記載したのか知らないが、多分に情報不足がこの蝶に関してはあるのではなかろうか。関心度の低い蝶だからそんなに多くのデータはないに違いない。

高根カントリーの南に武蔵森林公園がある。ここは海拔50~80mの丘陵地で、植物相、昆虫相が良く調査されている。リストを見るとコジャノメも記載されていた。

高根カントリー→森林公園のラインにコジャノメが棲息していることは、どうやら間違いなさそうである。ここまでくれば、ターゲットは明確になる。森林公園の南東に位置する吉見丘陵がそれである。ここは海拔20~60mで、荒川流域の沖積地に接している台地である。ここでコジャノメの棲息が確認されれば、もうコジャノメは立派に平野部で生活していると言えるのだ。

1988年7月30日、吉見丘陵の一角にある大沼（標高35m）の雑木林の中で、くもの巣と格闘していた。薄暗い林の中にコジャノメはそこそこに潜んでいた。この時、初めて私はコジャノメと対面したのであった。暗い林の中でコジャノメの蛇目紋が怪しい光彩を放っていた。同属のヒメジャノメとはまるで違う。コジャノメは薄暗い林の中で初めて存在感があるのであった。林縁部に出てくると、既に蛇目紋の光彩は消えて、地味な蝶に変身していた。

コジャノメは薄暗い林の蝶で、ヒメジャノメのように、林からオープンランドに進出してきた蝶と根本的に違うのである。林が伐採されれば、林と運命を共にする蝶なのかもしれない。そう考えると、コジャノメは武蔵野の雑木林にふさわしい蝶なのであろう。

つぎに訪れたのは、久米田部落の裏山（海拔25m）である。ためらう事なく林の中に突入した。林の中はやや明るかったが、コジャノメの姿はあちらこちらにみられた。今度は和名沼北の平地林に向かう。海拔20m、以前からマークしていた場所である。クヌギを主体とした雑な林であったが、ここでもコジャノメは生活していた。この和名沼の海拔20mにこだわってみよう。武蔵野は海拔10~60mの平地林をいう。しかし、武蔵野を詳細にみれば、地形は起伏に富み、坂や丘が存在する。いわゆる丘陵もある。マクロ的にみれば、平野部であろうが、実態は複雑なのである。例えば、東京の上野、赤坂、本郷等は海拔20m以上あり、起伏が多い。杉並、世田谷に至っては、海拔50~60mもある。今日、これらの地域は総て都市化され、武蔵野の面影は全くないが、時計の針を100年以上戻してみれば、吉見周辺よりも大規模な雑木林が再現され、コジャノメ等が生活していた事は容易に想像できるのである。

蝶の世界でみると、武蔵野の残存が吉見周辺にあるといえよう。

沖積地（海拔20m以下）でのコジャノメの発見

吉見町の調査で、コジャノメは立派に生活していることが確認できた。コジャノメは平野部でも生活環境が残されていたならば、生存できるのである。

のこととは別に、私はもう一つの欲があった。純粋な沖積地でのコジャノメの生存の確認である。

純粹な沖積地とは海拔20m以下の河川流域を指す。結局、行き着いた場所は部落の神社、寺院の林である。和名沼からの帰途、平地の寺院、神社を探しながら、車を止めたのが久保田部落の横見神社（海拔16m）である。一見して、コジャノメの棲息環境ではなかった。境内は狭く林も貧弱で、とても見込みはなかったが、駄目でもともとの気持ちで境内に入った。予想に反し、この貧弱な林にコジャノメが棲息していたのであった。翌週、再度、横見神社のコジャノメを確認して、もう一つの神社に向かう。前河内の日吉神社である。海拔13mの水田にかこまれた部落の小さな神社にもコジャノメは生活していたのであった。コジャノメは、完全に沖積地帯にも根をおろしていたのである。その後、高根カントリーの雑木林でもコジャノメを採集し、江南町の平地林でも多数のコジャノメを確認して、コジャノメの調査は終了したのである。

ある日、何気なく藤岡知夫さんの『蝶類大図鑑』を眺めていた。以前はこの本をよく読んだものであったが、最近は書庫に眠ったままになっていた。この図鑑でコジャノメの項を見たのは初めてであった。そこに記載されていたのは、浦和市10♂2♀の記録であった。いつ頃の記録か、浦和市の詳細な場所は記載されていなかったが、やはり、浦和市にもコジャノメが棲息していたのである。私の曖昧な記憶も嘘ではなかったようだ。調査が完了した現在、浦和市にコジャノメが棲息していても不思議はないと思っている。ただ、現在の浦和市に棲息しているかは知らない。

武藏野の平地にはまだ多くのコジャノメの棲息地が眠っているに違いない。なお、北本市の小堀文彦さんによると、北本市の石戸宿でコジャノメが棲息しているとのことである。

コジャノメに関する調査データ

埼玉県比企郡吉見町大沼（標高35m）

1988-7-30 6♂採集 目撃数頭 1989-7-30 2♂採集

埼玉県比企郡吉見町久米田部落（標高25m）

1988-7-30 5♂ 採集 1988-8-6 3♂2♀ 採集

埼玉県比企郡吉見町和名沼（標高20m）

1988-7-30 1♀ 採集 1989-8-9 2♂ 採集 1990-5-12 3♀ 採集

埼玉県比企郡吉見町横見神社（標高16m）

1988-7-30 3♂ 採集 1989-8-6 4♂1♀ 採集

1989-7-30 1♂2♀ 採集

埼玉県比企郡吉見町日吉神社（標高13m）

1988-8-6 3♂2♀ 採集 1989-6-4 1♀ 採集

1989-7-22 2♂ 採集

1990-5-12 2♂ 採集 目撃数頭

埼玉県大里郡江南町

1988-8-18 1♂ 採集 目撃数頭

その2 『クロヒカゲ』

少年時代の私はクロヒカゲの記憶を持っていない。クロヒカゲは武藏野には棲息していなかった。否、正確にいえば、浦和市周辺に棲息していなかった。目にする蝶は薄茶色のヒカゲチョウばかりでクロヒ

カゲの姿は見たことがなかった。クロヒカゲは平野部の蝶ではなく山の蝶である。つい最近まで私はそう思い込んでいた。

山に行けばまず目につくのはクロヒカゲである。どの山にもいる平凡な蝶なので、クロヒカゲを目的に採集にでかけた記憶はない。黒い日蔭蝶といった地味でいわゆる普通種なので、一度採集すれば後は見過ごしてしまう蝶である。『埼玉の蝶』にはクロヒカゲについて、つぎの記載がある。

『低山帯から亜高山帯にわたって広く分布し(中略)下限は長瀬宝登山から、更に低所の比企丘陵あたりでも稀に目撃される。更に棲息領域では、クロヒカゲは標高170m以上を主な棲息域としている』

この記載の通りクロヒカゲは平野部の蝶という概念に入っていたがなかった。私の記憶にもなかつたし、ジャノメチョウ科の中ではジャノメチョウとコジャノメの二種を追っていたのである。

1988年7月9日、ヒョウモン類の調査で滑川町の高根カントリーの林を訪れていた。目的のミドリヒョウモンの探索に失敗して、意気消沈して林の中を歩いていた時、クロヒカゲの姿を見た。『ああ、クロヒカゲかと一応は追いかけてみたが、すぐに姿を見失ってしまった。この時はクロヒカゲに関心がなかつたのであるが、帰宅後、何となく気になって調べてみたら、先のような記載であったのである。高根カントリーは比企丘陵の一角である。『比企丘陵で稀に目撃される』。この記載を再確認したことにより、クロヒカゲの存在を意識したのである。

7月23日、再び高根カントリーの雑木林にやってきた。本当は先週に予定したのであるが、土日共に雨でしかたなく延期したのである。この日も今にも降りだしそうな天気であったが、これ以上延期はできなかつた。クロヒカゲを目的にこんな天気の日にわざわざ出掛けるなんて、今まで考えられないことであった。

案の状、家を出てから間もなくして、霧雨が降りだした。車を走らせながら霧雨の中をたいして魅力もないクロヒカゲをわざわざ採集に行く自分がおかしかつた。確かに、クロヒカゲそのものは何の魅力もない蝶である。今更、標本箱に収めても意味がない蝶である。では、自分を動かしている原動力は一体何なんのだろう。蝶ではなく、その蝶の棲息地の下限を確認したいだけなのだ。クロヒカゲが里の蝶という認識があればわざわざ調査する必要はなかつた。私自身にその認識がなかつたから、そのことに興味を持ったにすぎない。

現地に到着して、林に入ったら、クロヒカゲがそここにいる。大部分の個体はすでに傷んでいたが、確認の為、いくつかの蝶をネットに収め林をあとにした。クロヒカゲは比企丘陵の高根カントリーの雑木林には稀ではなく、多産していた。この事実は私にある種のインパクトを与えたのである。今まで考えてみなかつたが、『クロヒカゲはひょっとすると平野部の蝶ではなかつたか』という疑問である。これは広く調査する必要がありそうだ。

つぎに訪れたのは、高根カントリーより約2キロ離れた江南町にある海拔45mの平地林である。八幡神社に近い水田と隣接している平地林である。ここは、かねてより目をつけていた場所である。環境は昔の浦和市の蓮昌寺の裏山と実によく似ていたからである。標高差は僅か20mである。

到着早々、ジャノメチョウの出迎えを受けた。ああ、昔の光景だ。40年前の光景が再現されようとしていた。しかし、蓮昌寺と違う光景が林の中で出会つたのである。蓮昌寺には棲息していなかつたクロ

ヒカゲが林の中で活発に飛びまわっていたのである。海拔50m足らずの平地林にもクロヒカゲは立派に生活していた。この事実は、クロヒカゲが山の蝶という私の既成概念を完全に打破するものであったのである。『クロヒカゲは里で生活できる蝶』なのである。そして、思いもしなかった武蔵野の雑木林の蝶だったのであった。

さらに、クロヒカゲを求めて、低標高の地に向かう。目的地は吉見丘陵である。吉見丘陵下部には、荒川支流の市野川が流れしており、吉見丘陵に接するあたりで二股に分かれ、東松山市と吉見町との境界を作っている。海拔20mの市野川の土手でクロヒカゲを採集した。吉見丘陵の隣接部であった。

ついで、吉見丘陵の大沼付近の林(海拔30~40m)でクロヒカゲを多数確認した。この時、前述のコジャノメを初めて確認したのである。

7月30日、久米田部落の裏山でもクロヒカゲの棲息を確認したのち、和名沼の平地林(海拔20m)でクロヒカゲを採集して、クロヒカゲの棲息下限が海拔20mであることがわかったのである。クロヒカゲは平地でも立派に生活できる蝶であった。しかも比企丘陵では稀ではなく、多産していた。

クロヒカゲは元来、平地の蝶であったが、だんだんと追い詰められて、今日の姿になったのか、元来、山の蝶であって、年々、生活領域を拡大して、平野部に降りてきたのかはわからない。ただ、コジャノメが棲息している横見神社や日吉神社等の沖積地には棲息していないので、クロヒカゲはコジャノメとはどこかで一線を引いているのかもしれない。それとも別のどこかの平野部で逞しく生活しているかもしれない。思えば不思議な出会いである。この平凡な蝶と高根カントリーの林で出会わなかつたならば、短期間でここまで追及できなかつたと思う。クロヒカゲは相変わらず『関心の低い蝶』として、霧の中にかくれたままだったかもしれない。

平林寺—残された最後の武蔵野の雑木林

武蔵野の面影を今日まで残しているのは、埼玉県新座市にある平林寺を於いてほかにないであろう。

平林寺は関東地方では有名な寺院のひとつで、1375年に建立されたという。新座市の現在の場所に移されたのは、1663年、川越城主、松平伊豆守信綱によってといわれている。

この平林寺に私が関心を持ったのは、裏山の雑木林であった。この雑木林は少なくとも300年以上は自然を保たれていると考えたからである。新座市は武蔵野の一角の海拔50m前後の台地である。周辺には山はない。しかも、平林寺周辺は開発され、住宅地になっている。

吉見町の海拔20mの雑木林で、クロヒカゲを多数確認して、『クロヒカゲは山の蝶ではない。昔は武蔵野の平地林にも生活していた蝶だ』と自分なりに結論を持つことができたが、一抹の不安もあった。吉見町の雑木林は丘陵地に接している。丘陵上部から移住してきたとも考えられ、武蔵野の平地林に昔生活していたと断定できないのである。

横見神社や日吉神社等の純粹な平地にクロヒカゲの姿が確認できなかったことも不安材料であった。

丘陵地から隔離された平地林—それは武蔵野の平林寺をおいてほかになかったのである。もしも、平林寺にクロヒカゲが生活していれば、疑う余地はない。クロヒカゲは武蔵野の蝶と今度は断定でき、ク

ロヒカゲもまた『失われた平野部の蝶』となるのである。

1988年10月10日、私はこの有名な平林寺を初めて訪れた。同行者は妻と妹と2才になる甥の4人で、クロヒカゲの調査と入れこんでいる私とは別に、実際は家族連れのピクニックの感があった。

平林寺には車で40分足らずで到着した。周囲は昔、武蔵野の雑木林が広く展開していたのであろうが、今は人家に囲まれ、境内だけが300年の自然を保っていた。拝観料を払って境内に入ると、立て札があり、動植物の採集はもとより、指定された道以外は絶対立ち入り禁止のものものしさである。最後に残された武蔵野の雑木林が天然記念物に指定されており、まるで大雪山や尾瀬などのものものしさである。

時期も遅いし、クロヒカゲに出会えるか不安であったが、まあ、なるようになるだろうと腹をくくって裏山を散策する。裏山はクヌギ、コナラを中心とした広大な雑木林である。クマザサが生い茂り、クロヒカゲの棲息する環境には申し分ない。しかし、クロヒカゲの姿は見られなかった。この日は祭日で、散策者も多く、道を外れ、林の中をゴソゴソと歩きまわるわけにもいかなかった。

なれば、クロヒカゲをあきらめかけていた時、前方のクマザサの上に黒い蝶影を見た。クロヒカゲだ。もう恥じも外聞もなく、クマザサの中にあって確認すると、まぎれもなく、クロヒカゲのメスであった。やはり、クロヒカゲは平林寺の雑木林に棲息していた。クロヒカゲの姿に感激したのは生まれて初めてのことである。再び、家族の輪に入って、散策していると、再びクロヒカゲが現れた。これもメスで、前の蝶より傷んでいない個体であった。木漏れ日の下でクロヒカゲは秋を楽しんでいるように、いつまでもそこを離れなかった。

平林寺のクロヒカゲは確認された。300年にわたって、この雑木林でしっかりと生き抜いていたのである。平林寺の雑木林が武蔵野の最後のクロヒカゲの棲家であった。

クロヒカゲに関する調査データ

埼玉県滑川町高根カントリー

1988-7-9 1♂ 目撃 1988-7-23 2♂ 6♀ 目撃多数 1989-7-30 1♀ 採集

埼玉県江南町八幡神社付近

1988-7-23 2♂ 採集 目撃数頭 1988-10-1 2♀ 採集 1989-7-30 2♀ 採集 目撃数頭

埼玉県吉見町大沼

1988-7-23 1♂ 1♀ 採集 目撃数頭 1989-7-7 1♂ 採集 1989-7-22 1♂ 採集 目撃多数

埼玉県吉見町和名沼

1988-7-30 1♂ 採集 1989-7-22 1♀ 採集 目撃数頭 1989-7-30 1♀ 採集

埼玉県吉見町久米田部落

1988-7-23 1♂ 1♀ 採集

埼玉県新座市平林寺

1988-10-10 3♀ 目撃

・・・・・・・・

埼玉県の興味ある双翅類 (1)

ダイミョウヒラタハナバエ (ヤドリバエ科)

玉木 長寿

・・・・・・・・

ハエやアブの仲間は膨大で、しかも変化に富んだ世界である。まだ知られていない種や、生態その他未発掘の分野が広く残されている、興味深いグループである。このたび牧林さんからのお勧めもあって、本県産の興味ある種類について、順序など気にせず、気楽に述べてみようと思う。いつまで続くかわからないが、気長におつき合い願えれば幸いである。また、誤りもまああろうかと思うが、お気づきの点はご叱正いただきたい。この稿が少しでも、同好の方々のご参考になれば、望外の悦びである。

今回は、ヤドリバエ科ヒラタハナバエ亞科のPhasiini族に属する、ダイミョウヒラタハナバエをとりあげる。

ダイミョウヒラタハナバエ *Phasia (Phasia) hemiptera* (FABRICIUS, 1794)
 (= *Allophora daimio* MATUMURA, 1916)

この種はヨーロッパ産の♀(Holotype)をもとに、*Syrphus hemipterus* FABRICIUSとして、1794年に原記載されたが、その後、学名の変遷をへて、現在は標記が用いられる。この種は、旧種小名 *daimio* や、和名からもうなづけるように、♂は「大名」の姿を思わせるように華麗で、どうどうとした外観を持つ特異なヤドリバエである(図1, 2)。

[採集記録と生態など]

日本では稀な種で、埼玉県ではこれまで未記録であった。筆者は1986年、'87年に毛呂山町の西部低山地(阿諏訪川上流)の沢沿いに立つ、同一株のミズキの梢上の花を訪れていた5♂1♀を採集したので、ここに記録する(埼玉県初記録)。

採集地：埼玉県入間郡毛呂山町大字阿諏訪(阿諏訪川上流、海拔高約250~300m)。

採集個体および採集日：1♂, 25.V.1986; 4♂1♀, 10.V.1987

標本の採集および保管者：筆者。

採集場所は、針葉樹や広葉樹の山林に囲まれた沢沿いに立つ樹高約5~8mほどの同一株のミズキの梢上(ほぼ上段の枝)の花で(図3)、次つぎに飛来して花を訪れるこの種を、継ぎ竿の捕虫網で採集

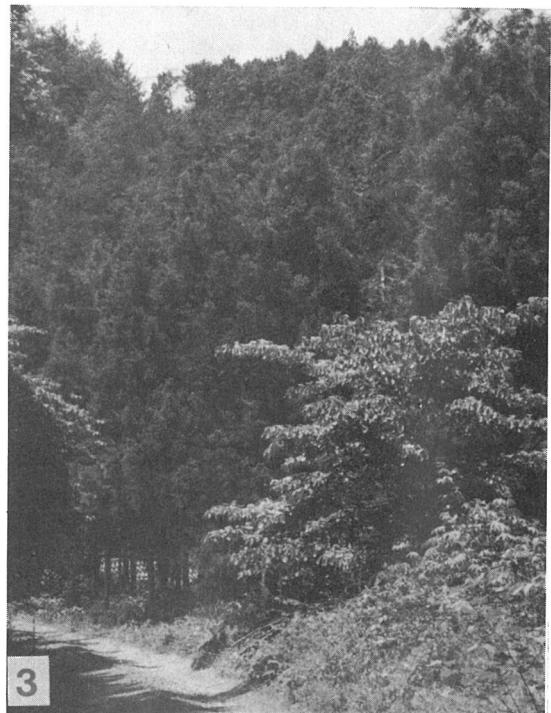
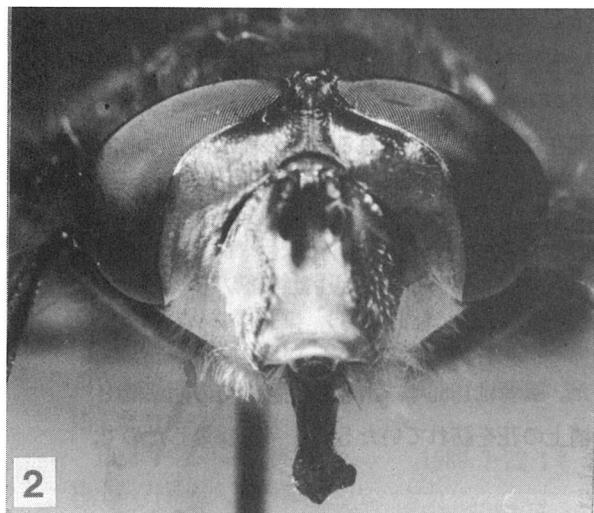
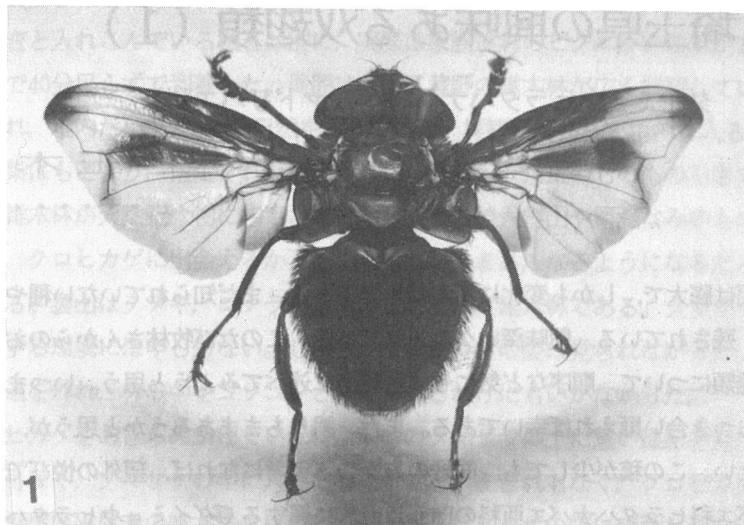


図1 ダイミョウヒラタハナバエ

図2 同 頭部前面

図3 生息地全景

した。また、その採集品には、通常の幅広い翅をもつ大型の♂に、より幅狭い翅を有し、かつ翅の前半がすす状にくもる、やや小型の♂と中間型の♂、さらに透明無斑の翅をもった♀が含まれていた。なおこれまで筆者は、低い位置に咲くヨメナやヒメジョンなどの花上では、この種を見たことがない。おそらく、埼玉県で今までこの種が発見されていなかったのは、ほかのヒラタハナバエ亜科の種とは生態が異なり、ミズキの梢上の花など比較的に高い位置に咲く花に、好んで飛来する習性をもつことも、原因の一つかもしれない。

[形態的特徴]

埼玉県毛呂山町の標本をもとに、おもな特徴について簡単に触れてみたい。

♂：体長約11.5～14.0mm（旧北区についての文献では、7.5～14.5mm）。

頭部は背面から見て、胸部より幅広くかつ、前後に強く圧せられ、額は広く、複眼は互いに離れるが、頭頂前では単眼瘤よりやや幅狭く、額帯は黒褐色。亜額帯、亜側顎上部は黒灰色で、輝白灰色に粉飾、黒色細毛を密生する。その下方は淡黄色で、白色に粉飾し、白色の長軟毛をそなえる。触角は短く、淡黄赤色の第2節端と第3節基部を除き、黒褐色。小顎肢は細く短く、暗褐色。

頭部の主な剛毛：弱い額剛毛と、顎隆起縁の下部1/2ほどから、口上突起の高さ近くまで、細い小剛毛が、不規則な微毛列をともなって下降、列生する。

中胸背板はわずかに緑色を帯びた黒褐色で、弱く灰色に粉飾、幅広い黒色の5縦条をもち、肩瘤、翅後瘤は黒褐色で、灰色に粉飾する。大型の個体では、胸背の黒色短毛とともに、前胸背で淡赤黄色の短毛を混生する。胸背（翅後瘤下縁、小楯板下側縁を含めて）は、顯著な淡黄赤色長毛に、わずかな赤灰色長毛の束を混生する。

小楯板は背面からみて、ほぼ三角形状。色彩は褐色を帯びた淡黄赤色で、基部は暗色。後小楯板は黒色で、小楯板とともに白灰色に粉飾される。

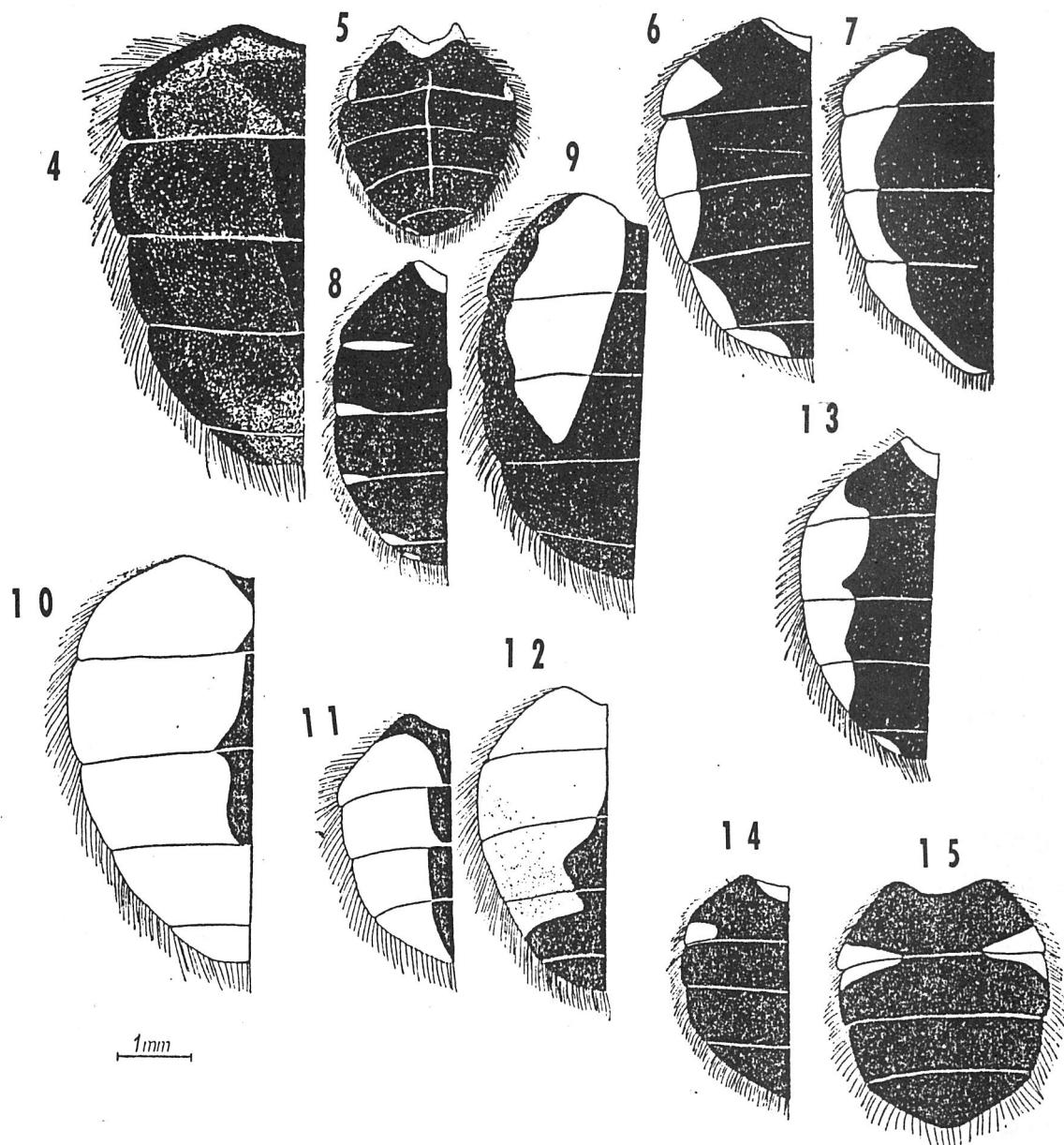
胸部の主な剛毛配列：正中剛毛、0+1（ときに0+2）；翅内剛毛を欠く；強い翅背剛毛1；横線前剛毛1；強い背側剛毛と翅後剛毛、各2；ときに胸腹側剛毛1（♂の翅背剛毛以下については、文献⁽¹⁾に記述はない）。

小楯板の剛毛：基剛毛1対は斜めに上向しかつ、ほぼ平行する。端剛毛は短小の1対。

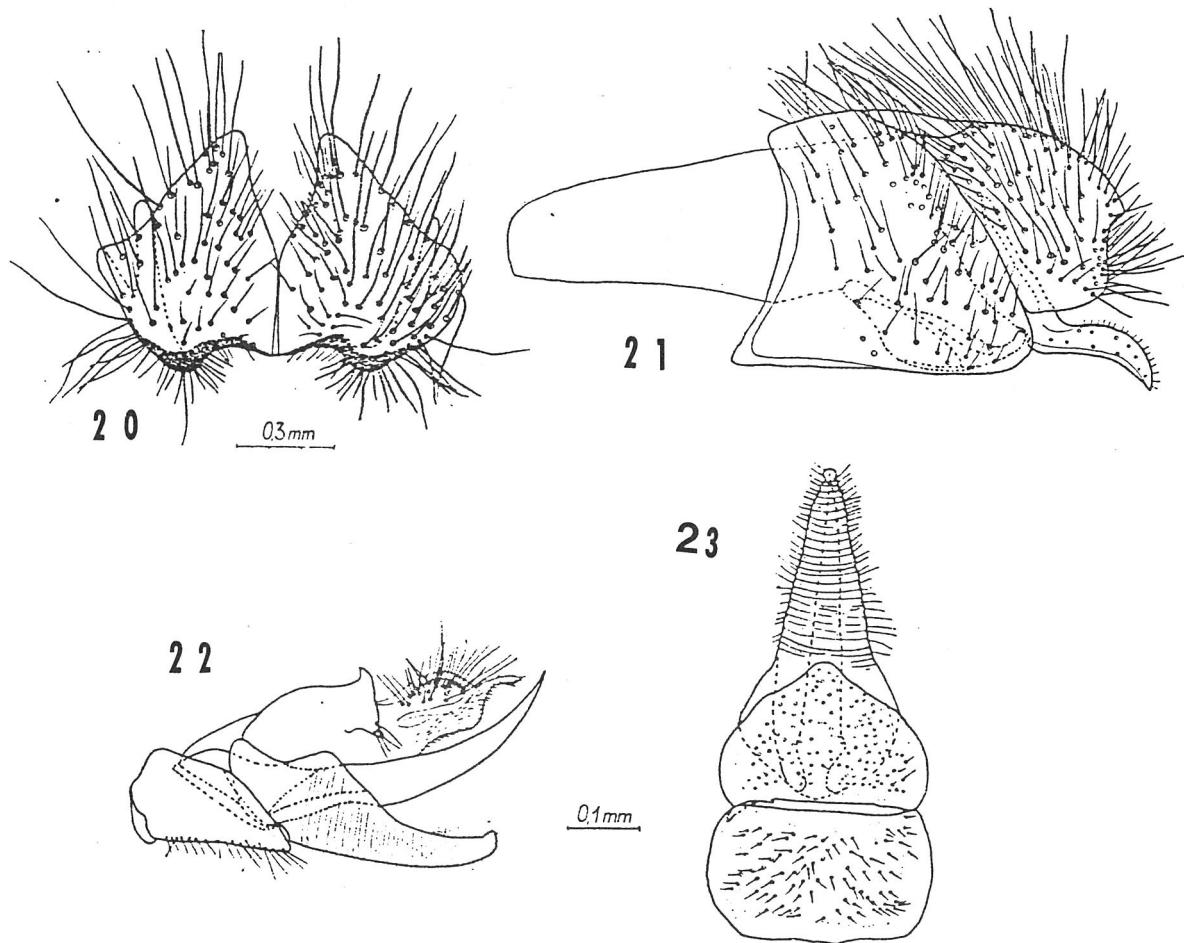
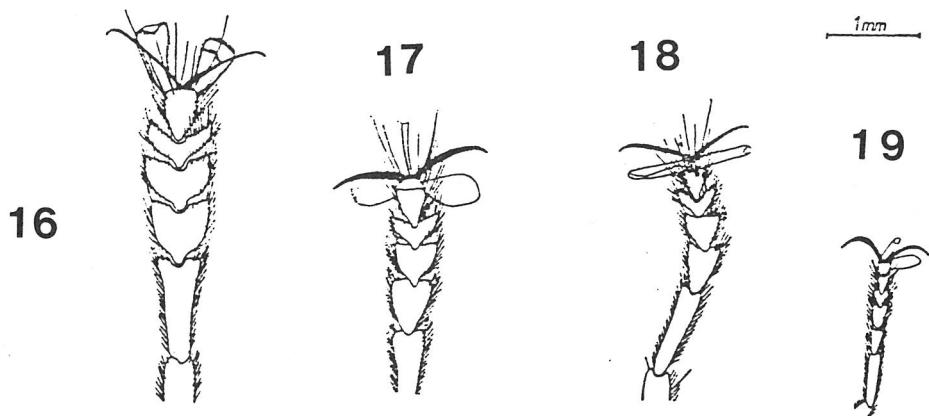
腹部は幅広く、偏平、赤褐色で背面に黒色の斑紋をそなえるが、この黒色斑は幅狭い縦条から、ほぼ腹背全面の暗化まで、さまざまな変異がある（図4～15）。しかし、毛呂山町産の標本では通常、腹背の赤褐色帶は幅狭く、外縁をふちどるのみで、その外縁は赤黒色の縁毛でふちどられる。通常第1+2背板前側角に淡黄赤色毛、第4、第5背板の後側縁と第6背板の後縁にいくらかの橙黄色毛が、腹背の黒色被毛とともに混生する。

肩板と前縁脈基部片は黒色で、黃金色に粉飾される。

翅は通常幅広く（日本産の個体ではしばしば、ほぼ三角形状に顯著に拡大する⁽¹⁾），前縁脈は弓状にまがり、R₅室は閉じて、翅脈に短い柄がある。翅膜には褐色斑があらわれる（毛呂山町産のやや小



腹部の形態と色彩の変異 (図4~15) 図4, 7, 日本 ♂; 図5, ソ連, カムチャッカ ♂; 図6, 下部オーストリア ♂; 図8, ソ連, Ussuri-Gebiet ♂; 図9, ベルギー ♂; 図10, ポーランド ♂; 図11, ドイツ, Wienerwald ♂; 図12, ソ連, サハリン ♂; 図13, ドイツ, Wienerwald ♀; 図14, ベルギー ♀; 図15, 日本 ♀



♂前脚跗節(図16~19), ♂腹端(図20), Cerci(図21)と♀交尾器(図22, 23) 図16, 18, 日本産;
図17, ドイツ, チロール; 図19, ソ連, カムチャッカ; 図20, ♂腹端側面; 図21, Cerci 前面; 図22,
23, ♀交尾器(日本).

型の標本では、翅は幅狭く、その前半がいちように褐色すす状にくもるものまで、変異がある）。胸弁は光沢ある暗褐色で半透明。

脚は褐色から黒褐色ないし黒色。ただし、中腿節基部、後腿節基半は淡黄赤色。

日本産の♂の個体には、ほかの旧北区各地産の個体に比較して、著しく幅広く発達した前脚ふ節をもつものがある（図16）。毛呂山町産の大型の♂にも、このような個体があった（図1）。脚の基部は淡黄色の長軟毛で被われる。脚の剛毛については省略する。♂の腹端、cerci（尾角）などについては、図20, 21を参照されたい。

♀：体長約11mm（文献⁽¹⁾では8.5～13mm）。

♂と異なるおもな特徴はつきの通り。

額は♂よりも幅狭く、頭頂前で単眼瘤のほぼ1/2倍幅。亜額帯、亜側顔背部は黒灰色で、輝黄灰色に粉飾する。その腹方は淡黄紅色で、輝黄白色に粉飾し、黄白色長軟毛で被われる。

胸、腹背はおむね黒色。腹部第1+2背板の後側縁に幅狭い赤褐色の1小斑を残すのみ。胸背の淡赤黄色毛は♂と異なり、ほぼ胸背全域で、直立の黒色被毛と混生する。胸側の淡黄赤色毛は♂における場合と同様である。

胸部の剛毛の♂との相違点：背中剛毛1+1（文献⁽¹⁾では1+2）；翅内剛毛を欠く（文献⁽¹⁾ではかなり弱い）；強い肩剛毛1；胸腹側剛毛1。

翅膜は透明で淡色、無斑。基部はいくらか褐色を帯びる。胸弁の色彩は♂よりも明るい光沢ある黄褐色、半透明。

脚は、淡黄赤色の後腿節基半をのぞき、ほぼ黒褐色ないし黒色。爪と櫛盤は♂よりも短く、末端跗節と等長。

♀の交尾器については、図22, 23を参照されたい。

前述のように、この種の♀は一見、同種と思えないほど♂と形態、色彩が異なる。

[分布]

日本（北海道、本州）；北ヨーロッパ～アイルランド、イングランド、南スウェーデン、レニングラード；トランスクーカシア、南シベリア、ソ連極東部（沿海地方、カムチャッカ、サハリン）、クナシリ〔文献⁽²⁾より引用、筆者加筆〕。

[寄主]

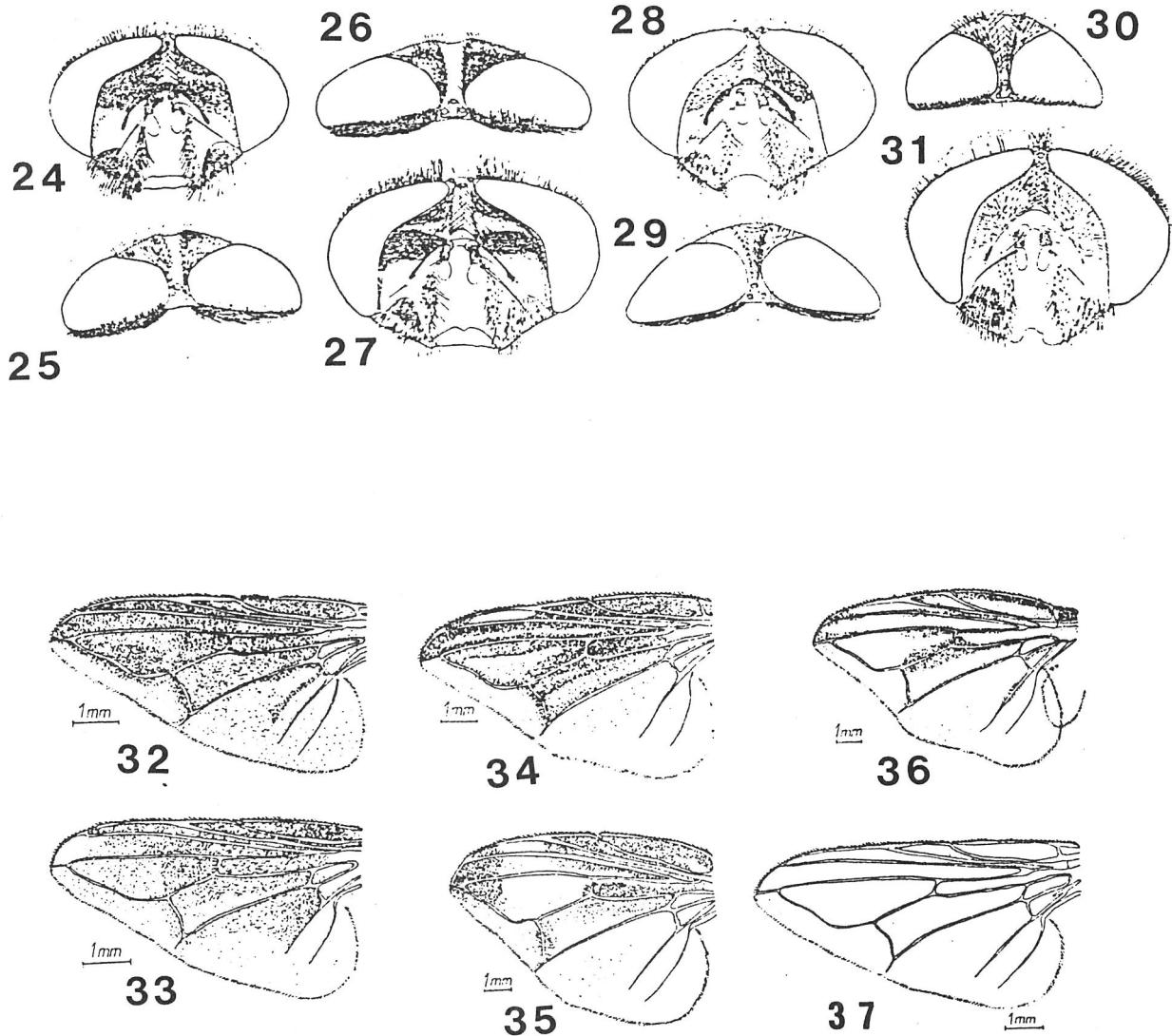
文献⁽¹⁾によるもので、海外の記録である。____線の部分は筆者が加筆した。

Pentatomidae カメムシ科、Pentatominae（カメムシ亞科）に属する3種。

Palomena prasina (LINNAEUS) (DUPUIS, 1960)

Pentatoma rufipes (LINNAEUS) (DUPUIS, 1960) アシアカカメムシ

Pentatoma metatiformis (MOTSCHULSKY)



頭部の形態の変異 (図24~31) と翅の形態と色彩の変異 (図32~37)

図24, 25. (旧)変種 *vittata* (ドイツ, Wienerwald); 図26, 27. (旧)変種 *eximia* (ドイツ, Wienerwald); 図28, 29. (旧)変種 *obscura* (ドイツ, Wienerwald); 図30, 31. ♀頭部(日本); 図32. ソ連, 沿海地方♂; 図33. ドイツ Erfurt♂; 図34. ポーランド♂; 図35, 36. 日本♂; 図37. 日本♀

〔補遺〕

ダイミョウヒラタハナバエの属する *Phasia* 属(旧属名 *Alophora*) については、ADRABER-MOÑKO が126ページにおよぶモノグラフを書いている。そのなかで、旧北区各地産の本種の♂♀の標本の頭、胸、腹部、交尾器、翅、脚などが図示解説されているので、一部を引用しておく(図4~37)。なお、このモノグラフで ADRABER-MOÑKO は、ダイミョウヒラタハナバエ♂の3変種 [vittata(図24, 25); eximia(図26, 27); obscura(図28, 29)] とともに GIRSCHNER による命名]について触れている。日本産のものとしては、vittata には北海道知床産、札幌産のものを、obscura には兵庫県のSasayama (=? 篠山) 産の該当標本があるという。現在、この3変種の取扱いはなされていないようだが、変異の傾向として参考になると考へるので、それらの図をあわせて引用紹介しておく。

〔参考文献〕

- DRABER-MOÑKO, A. (1965) Monographie der palaearktischen Arten der Gattung Alophora R.-D. (Diptera, Larvaevoridae). Annls zool. Warsz. 23:69-194.
- HERTING, B. (1984) Catalogue of Palearctic Tachinidae (Diptera). Stutt. Beitr. Naturk. A(369):1-228.
- 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター, (1989) 日本産昆虫総目録, II.

(たまき ながひさ 番号350-04 入間郡毛呂山町前久保 332-122)

「チョウ類憐みの令症候群」蔓延す

エコロジスト
—ある似非自然保護運動家への怒り—

中川利用勝

近年、広く環境問題を含めた自然保護論議が盛んである。私自身、人類の最重要課題のひとつである自然保護問題の解決のための有効、かつ最良の方策は知らないが、現実に目を向ければ、全国的、いや全世界的な規模で「開発」という美名の下に、公然と自然破壊、あるいは環境破壊が行われている。

地球上で、最も歎知であると自負している人間たちも、豊かさを追及すればするほど、環境破壊が際限なく拡がるという二律背反の現実の前には、完全なる悪者にもなりきれず、贖罪の意識からか、短絡的に、それら生物たちとのかかわりにおいて、最前線に位置する私達に、自然破壊者の元凶であるかのごとき烙印を押すことで、溜飲を下げている風潮がある。

昆虫の世界に限ってみても、あるものはマスコミに踊らされて、自然保護の大義名分をふりかざし、アマチュア研究家であろうが、営利目的の標本商であろうが、内容の如何を問わず、感情をむき出しにして殺りく者呼ばわりしている。私は、非力な愛好家のひとりにすぎないので、難しいことはわからないが、環境を守る、自然を守る、あるいは生き物を守るということは、「～しては可哀相だ」という感情論だけに結びつけては、決して解決し得ないということだけは言えると思う。理性的、かつ木を見ても森を見失わないような、大局的なものの見方が必要であるように思うのである。

昨年、この問題に関して、不愉快を通り越して怒りさえ覚える出来事に遭遇した。これはその時の咄なのであるが、皆さんにもきっと、私のようなあと味の悪い体験が、一度や二度はあるのではないかと思う。

以下紹介する咄は気楽に読んでいただけたらと思い、少し碎いた文章にさせていただいた。

さて、その不愉快な咄であるが・・・・

1. 事の始まり

1990年の夏は異常な暑さで、人間以外の生き物たちにもかなりこたえたようだ。斯くいう小生、猛暑の中、8月も下旬に入るやシリビアシジミの生息地探しに躍起となっていた頃のことである。思い起こせば数年前も、埼玉県内の本種を求めて、利根川河川敷や比企郡吉見町をさまよい歩いた記憶がある。結果は全くの空振り。と云うより、この蝶の唯一の拠りどころであるミヤコグサが見つからないのだ。余談になるが、後日伺った話では、我が談話会の顧問になられた市川和夫氏も、小生同様、吉見町のシリビアシジミを調査されたことがあるとか・・・・。

県内の本庄や吉見が駄目なら、今年は思いきって利根川をさらに上流に入った群馬県まで行こう、いや、同じ行くなら山梨県でも固体数の多そうな市川大門にしようか、などと空想にふけっていた矢先、小生の子供の頃からの蝶友（悪戯友達と呼ぶべきか）とのTELで「今年も清澄でルーミスを2ヶタ採っ

たゾヨ」という話を聞かされたことからこの話が始まる。

この川口に住む幼なじみS氏は、ダイナミックな性格故か、10代の頃から北海道、本州はもとより、九州は対馬、屋久島なんのその、宮古島の先の波照間島までも目指す程の猛者で、日本国内では飽き足らず、当時まだ、ワシントン条約の対象外だったトリバネアゲハを求めてインドネシアへ、さらに最近では、パルナシウスを求めて一人で中国の奥地にまで遠征した人物である。

S氏いわく、「シルビアなんか止めて、ルーミスにしろよ。今ならまだ採集期だから充分間に合うよ。その方が絶対いいぜ」。数年来、淡い恋心を抱いていたシルビアシジミをゴミのようにおっしゃる。それでも早速S氏宅に参上し、ルーミス拝見に至ったのは言うまでもない。

結局、考えた末、というより深い考えなしに目的をルーミスシジミに変更し、川口のS氏宅で現地の情報を入手、天気予報を綿密に考慮した上、晴天無風の日を見計らって清澄山へ行くことになったのである。

数日後、快晴の空の下、小生の小型乗用車は日曜日の朝風の中を一路、南房総清澄山へ。取らぬ狸の皮算用とはこのことで、車中、帰りの収穫に胸おどる気持ちを押しころして、窓から空を見上げた時のショック！。ガーン、ナ・なんと現地間近にして雲ゆきがあやしいではないか！！頭の中はみるみる白くなり、ステアリングを握る手から力が抜けて、車も真っすぐ走らない。「まいったナ～」を連発しながらも、引き返す踏ん切りもつかず、予定どおり行動することに決めた。

2. ルーミスシジミなる蝶

実は小生、長い蝶歴の中で、3～4年公私共多忙な時期に、昆虫たちから遠ざかっていた時期があった。数年前から虫愛づる血が騒ぎだし、また古巣の昆虫界へ舞戻った訳であるが、昔からルーミスシジミなる蝶には、とんと興味が涌かなかった。

小生の潜在意識下においてはルーミスシジミは長い間、分布の特異性を示すキマダラルリツバメのような存在であったような気がする。古来、ルーミスシジミは日本産蝶類の中でも、指折り数えられる程の珍蝶とされてきた時代もあった。分布最北端の清澄山系のルーミスシジミのポイントを知っていても、採れるかも知れないし、採れないかも知れない不確実な要素をもったイメージが、小生の中に根強くあり、加えて千葉県という土地柄、他に注目すべき面白い蝶がないということも手伝って足が遠のいていた。まさに、関東周辺部に点在して分布する珍蝶キマダラルリツバメのごとき感があったのである。

(あとにして思えば、発生数の少なさ、シリアゲアリの存在が本種の生存に欠かせない要素であること、生息地の環境が、より人間の生活環境に密着した微妙なバランスの上に成り立っていることを考えると、小生にとっては、キマダラルリツバメの方が、より希少価値があるのだが・・・)

長い能書きはさておき、とにもかくにも、小生にとって初体験のルーミスシジミ採集の幕は切って落とされたのである。

3. 採集テクニック実践による悲劇

「ルーミスはナ、むし暑い日は、陽もささないような原生林の沢すじに降りているんだよ。それも午前中が勝負だぜ。」とS氏。

「沢沿いに小径もあるのかい？」と小生。「あるにはあるけどヨ、沢に靴ごとはいっちゃうんだよ。ジャブジャブと歩きながら、下に降りているヤツを拾うんだよ。それからツナギ竿でチョンチョンと、沢沿いの木を叩くんだよ。そうすっと、午前中なら下に降りてくるから、それを採集していけば馬鹿でも2ケタはカタイ！」とS氏。

「何段ツナギくらいが必要？」

「3段もあれば充分だぜ。要するに沢の中へ靴ごとジャブジャブ入る、これがポイントヨ。深いところでも、水はヒザくらいまでだし、足場は良好、魚もいるし、暑い日にやすずしくて気持ちイイゼエ～」との御託宣。

帰りの着替えズボンと、サンダルを忘れないようにとの、あたたかい思いやりの言葉に送り出されて、決意を新たにした小生であったのだが・・・

かくして『火中の栗を拾う』ではないが、水中のルーミスを拾うがごとき、悲惨な「必殺水中靴ごと作戦」が、南房総清澄山を舞台に始まろうとしていたことなど、誰が予期し得ただろうか。

S氏から持たされた、大ざっぱな見取り図を片手に現地入り。ところが・・・、ところがである。現地ではダム工事現場が至る所にあり（というより、気がついたら工事現場のまっ只中に小生がいたという方が正解か）、全く見取り図が役に立たず、ガゼネタでもつかまされたような気分で周囲を右往左往する始末。日曜日というのに採集者すらないので、道を尋ねる訳にもいかず、途方にくれていた矢先、目の前をタクシーから降りる二人づれのルーミスシジミ採集者を発見。『地獄に仏』とまではいかないまでも、『渡りに舟』くらいのインパクトはあった。

彼らにS氏の見取り図を見せて、ルーミスの生息を確信するに至ってひと安心。確かにこの付近にルーミスはいるのだ。

二人の採集者について、沢の出会いまで同行させてもらうことにしたのだが、そのうちの親切そうな一人が、「その地図に示してある沢は、この沢です。これを上流につめれば多分いますよ。今日の天気なら初心者でも20はカタイですよ」という。

実はこの沢、三人を前にして二股に岐れていたのである。小生の薦められた沢は比較的大きな沢で、どちらかと言えば「谷」であった。念のため「もう一方の沢はどうなんですか？」と尋ねると、「この辺の沢は何処にでもいますよ、多分。それにどっちへ行っても上流で合流していますよ。」とのこと。

幸いにして、雲の切れ間から陽が指してきた。いよいよ運が向いてきたと思ったのも無理からぬ話である。

期待が高まるごとに、年齢に関係なく足取りが速くなるものらしい。三人で歩いているつもりが、100メートルほど歩いて気が付くと小生一人・・・。振り返ると二人に影はない。小さな沢の方へ入ったのだろうか、自分の歩いている沢沿いは間違いなくルーミスがいるのだろうか、などと不安がよぎるが、上流で合流する訳だから、「まっ、いいか」と溜め息はじりにひとり言を言いつつ沢への下り口を捜すが、足場が悪くなかなか適当な沢への下り口が見付からない。なにしろ沢というより谷である。下り口を捜すのにひと苦労するうち、やっと沢すじに沿って歩けそうな小径らしきものを発見する。「これだな」と思いつつ、沢沿いに歩くこと数メートルで小径らしきものは消えている。止むなく覚悟を決めて、靴ごと水中へ・・・。

沢の幅は予想していたよりも広く、3メートル以上はありそうだ。こんな大きな沢で大丈夫だろうかと、またしても不安がよぎるが、かまわずツナギ竿で沢すじの木々を叩いてまわるが、落ち葉以外何も

出ない。こうなってくると、二人づれの言った「いますよ、多分」の多分というファジィな響きが妙に気になる。『いますよ、多分』というのは、『いないかも知れない』という内容と表裏一体だからだ。足もとの沢に目を落とすと——、いるのだ！。勢いよく逃げていく川魚の群れと、岸辺で派手なアロハを着た、人相の悪いハンミョウのグループが・・・・。

4. 泣き面に蜂

決死の「必殺水中靴ごと作戦」は、すずしくて気持ちがいいどころか惨鼻を極めた。足場はヌルヌル、水をたっぷり吸って太った靴は殊のほか重い。水はズボンのヒザまでどころか、運悪く深みにはまり、まさにパンツにまで届こうとしている。非情にも追いうちをかけるように、水の中へ入るや否や、15分もしないうちに、よもやの雨が・・・・。「嗚呼・・・万事窮す・・・」

もはや、ルーミスシジミどころではない。重い心と体に鞭打って引き返すことになった。途中の成果は、小雨の中でウラギンシジミ1♂のみ。

ようやく沢を脱出し、先ほど三人で立ち止まった沢の分岐点まで戻ったところで、しばし雨が止んだので、もう一方の沢へ行くべきか迷ったが、結局、行くだけ行ってみようということで小さな沢沿いの径へ。なんと、こちらの方が沢が小さく、ルーミスもいそうな環境の上、何よりも水の中へ入らなくとも済みそうなのである。しかし、怨めしそうに見上げる空は、厚い雨雲におおわれて、とても晴れそうな気配はない。

虫屋の悲しい性というか、諦めて帰路についたつもりでも、なお両の手は相変わらず沢沿いの木々を叩いている。・・・と、何か黒いシジミが梢から梢へ。ルーミスにしては、少し大きく黒い感じがしたが、はっきりと確認できない。再度梢を叩いて、ルーミスシジミかも知れない蝶の位置を確認する。こんな時の虫屋の心境は、ある種の胸の高鳴りと緊張感をともなうものなのだが、小生の場合は違った。二度目の飛翔で静止位置を確認した時点で、この蝶が、ムラサキシジミかも知れない蝶へと変わっていたからである。ともかくここは精神を集中してネットを一閃——。果たしてムラサキシジミであった。泣くに泣けない気持ちで歩き出すと、皮肉なことに、小生の代わりに空がまた泣き出した。それも大泣きだ。

5. 弱り目にたたり目

ここまで話が進んでくると、何の収穫もない採集記のようで、皆さんはいささか食傷気味になる頃ではないだろうか。ところが、「ある似非自然保護運動家への怒り」という本来のテーマはここからなのである。

泥だらけの靴と、ずぶ濡れになった体を引きずって、小雨降る車道を落武者の体で歩いていたときのことである。この日、小生の愛車はたまたまこの車道から1キロメートル近く手前の駐車場に置いてきたため、断続的に降る雨の中をしばし歩かなければならなかつたのである。すると、坂道を上がってゆく小生の目の前に、上から下ってくる、煤けたオレンジ色のワゴン車が一台。中から運転手が、胡散臭そうにこちらを見ながらすれ違った。数メートルやり過ぎした後、おもむろに車を止め、40ガラミの男

が顔を出し、

「何処から来たの？」

と問うではないか。この時点で私は不覚にも泉谷しげるの迷曲、『黒いカバン』の世界に引き込まれていたのである。不意をつかれて意味も呑み込めぬまま、下の沢から上がってきたのだということを話すと、要領を得ないといった様子で、例のオレンジ色のワゴンからその男が降りてきたのである。まだらに日焼けしたドジョウのような顔をしたその男は、私を地元の人間ではないと踏んで、言いがかりをつけてきたのだ。私は売られた喧嘩も買いたくない性分である。嫁さんは千葉の産であるし、親類も多少はいるので、全く他所者ではない旨話して、私はこの場をかわすことにした。

余談ではあるが、小生めと千葉県とは、何の因縁か、幼少の頃からすこぶる相性がよろしくない。それ故今回も、何かしらイヤな「虫の知らせ」めいた予感があるにはあった（千葉の人ゴメンナサイ）。ところが、合縁奇縁といゆのか、相性の悪さをよそに、不思議と縁があるのも千葉県なのである。思えば、10代の若かりし頃の初デートの相手が柏市で、初恋の女のコは佐倉市で、嫁さんの郷里は船橋市である。加えるに父方の実家は、現在でこそ東京の江戸川区であるが、その昔は千葉県であったとも聞く。何のことではない、小生自身、ルーツをたどれば、何分の一かは千葉の血が流れていることになる。そのわりには千葉県に足を踏み入れると、今回のような不愉快な出来事も数多いのであるが、別に千葉県の悪口を書きたてるつもりは毛頭ないので、千葉の人、アシカラズ。

余談がすぎたが、先刻のオレンジ色のワゴンから降りてきた男へ話を戻そう。

その男、何の権限があってか、たて続けに、「職業はなんだ?」「話し方が教師のようだが学校の先生か?、それとも役所の人間か?」と小生に尋問してくるのである。この男あまりに尊大で失礼な態度に、他人の住所や職業を問う前に、自分の紹介からすべきだと促すと、どうやらルーミスシジミの記事を、新聞か同好会誌で知って、民間レベルでルーミスシジミを乱獲から守ろうと、休日に出向いてきては採集禁止を叫んでいる男らしい。市役所のしかるべき課にも、ルーミスシジミの採集禁止を提案中であるという。

思えば、ルーミスシジミに関しては、小生、自分で調べもせず、不勉強の域を出なかったので、よもや最近、条例か何かで御禁制にでもなっているのかと、当初は不安になったものである。

「付近に採集禁止を呼びかけた貼紙がはってあったはずだ。全部でこの周辺に5枚はってある」。その言葉は気の弱い小生を、さらに不安にさせたのは言うまでもない。小生は、下の沢から上がってきたので、貼紙などは見ていないということにしておいたが、実は、沢に入る前に一ヶ所だけ、貼紙がはってあったのを、見てはいたのである。しかし、現実に、ルーミスシジミを採集していない（というより採集できなかった）という強みがあるので、強気で抗弁すると、三角ケースの中身を見せろという。三角紙の中には、ムラサキシジミとウラギンシジミ各一頭づつしか入っていないので、応じることになると、今度はナント!、ウラギンシジミをルーミスシジミではないかと疑ってかかる始末。素人の目には、ウラギンシジミの銀色は、よほど珍奇に映ったのであろう。

まぎれもなく、このドジョウ男は似非自然保護運動家であると確信した小生は、それ以上話すこと自体、無意味であると感じた。何しろ、このドジョウは、煮ても焼いても喰えないのである。ルーミス

スシジミの保護を訴えているわりには、ルーミスシジミ自体知らないのである。いわんや、その生態においておやである。まったく笑止千万！！

聞けば、関東地方のオオタカの密猟が叫ばれたときも、生息地へ出掛けたオオタカならぬ、密猟者とおぼしき他県ナンバーの車をカメラに収めていたらしいが、この人物、どれ程オオタカの生態を理解していたか疑問である。よくみると、小生との会話中にも、目前を通過する他県ナンバーの車を、まめにコンパクトカメラにおさめているではないか！！他県ナンバーの車というそれだけの理由で、ナンバーを撮影して一体何をしようというのか。後日、何かの証拠にでもするのであろうか。あまりに愚かしい行為に、小生は、人格権の侵害にでもなりかねないから止めた方がよいと勧告したのだが、まったく聞き入れない。それどころか最近、標本商が入りこんで乱獲していった話しを引き合いに出し、小生と結びつけては、延々と説教を続ける始末。降りしきる雨の中、適当に切り上げようとする小生に、食下がること、食下がること・・・。小生はいつしか、このドジョウ男の格好の餌に成り下がっていた。彼にすれば、十把一からげ、乱獲業者もアマチュア愛好家も、憎むべき敵なのである。

すっかり苦りきっているところへ、はたして先程ナンバーごと撮影された車が2台、いぶかしげにUターンして戻ってきたではないか。2台の車に分乗していた計4名の虫屋は、事の経緯を理解するや、その似非自然保護運動家に集中抗議の雨、雨、雨。そのうちの一人は、東京の同好会所属、千葉県在住の獣医さんで、寸分のすきのない理論で、相手をねじ伏せたのである。

ルーミスシジミの生態のこと、当地は国立公園や国定公園に含まれておらず、現時点では採集禁止の指定も受けていないこと、さらには、地元でルーミスシジミを守るのであれば、現在進行中のダムによる生息地水没を防ぎ、生態系を守る運動を、関係省庁にはたらきかけるのが、本来先決ではないか等々。無論、ナンバー入りの車の撮影フィルムの返還を求めたのは言うまでもない。

結局、多勢に無勢。あわれにも、この似非自然保護運動家は説き伏せられ、ニヤニヤしながら退散という、何とも縊まらない幕切れと相成った。

数年を待たずに、その生息地の半分がダムに水没するやも知れぬ運命にあるルーミスシジミたちが、我々の言葉を理解できたとしたら、この6名の言い争いをどう思ったであろうか。自分たちの保護をめぐる、どんな熱い議論も、現場のブルドーザーの前には、空しさに歯ぎしりならぬ、触角ぎしりせざるを得ないのではないかと思うのは小生だけであろうか・・・・

6. 言わせてもらえば

1990年、山梨県明野村でも驚くべき話を耳にした。当地で、蛾(スカシバの仲間)を採集していて、地元の人に注意をうけた虫屋がいた。彼は、一般の人が好まない蛾を探っていて、他人に注意を受けたのは初めてだと語っていたが、何のことはない、人気のオオクワガタ採集と勘違いされたのだ。現地では、心ないクワガタ採集者が、不用意にも、山林や畑に入り込んで荒らしてしまうトラブルがおきているらしい。地元の人たちとしては、他所者に珍しい昆虫を持っていかれるのはたまらぬという、怒りにも似た感情もあるのだろう。わからなくもないが、この一件はさらにエスカレートし、採集者のものらしい車のタイヤに、千枚通しのようなもので穴を開けている。信じがたい不心得者が一部いるという話がある。単なる噂なら問題はないのだが、念のため、付近に車を止めない方がよいという。

その昔、ヒサマツミドリシジミの食樹切り倒し事件が、社会問題として報道された折、これはもはや

犯罪であるという記事を目にしたことがある。確かに、全く弁解の余地はないが、自然保護を楯に、採集者をめのかたきにして、彼らの車のタイヤに穴をあける行為があったとしたら、これもまた、犯罪以外になにものでもない。

7. 「チョウ類憐みの令症候群」蔓延す

自然を保護するということは、容易なことではない。私たちが、物質的な豊かさを追及すればするほど、開発による自然破壊に直面せざるを得ない。私たちの生活面からとらえると、自然を保護すること自体は、非効率的であり、また、非生産的である。所謂カネにはならない。他方、自然を開発することは、効率性、生産性を高め、経済活動を促進し、カネを生む。いきおい、自然保護を謳いながらも、開発による自然破壊を招いてしまう所以であろう。こうしてみると、今日、豊かさの本当の意味を考え直すことこそ、自然を保護する第一歩になるのかも知れない。

私の好きなチョウについていえば、世はまさに、「生類憐みの令」ならぬ「チョウ類憐みの令症候群」が蔓延している。稀少種を守れという理念は否定しないが、絶滅の危機が叫ばれてからの保護運動では遅すぎるのである。自然を保護するのであれば、ひとにぎりの種を絶滅から守ることだけでは駄目で、自然環境、すなわち、生物の場合は生態系を守らなければ意味がない。生態系を守るという、このことが、自然保護に結びつく大前提であるということを、広く一般の人々に理解してもらうには、成年になって、マスコミの報道する動植物絶滅の危機の記事に踊らされて採集禁止を叫ぶのではなく、子供の頃から自然に触れさせる教育(採るなさわるなどの教育ではない)を通して、生態系あるいは食物連鎖のしくみを体で知ってもらうことが大切であると思うのである。

いずれにしても、私たち昆虫愛好家にとっては、受難の時代なのだ。

P S : 雨で一度ルーミスシジミとの出会いに失敗した「小生」であったが、後日再度挑戦して無事採集することができたので、同情下さったむきは、御安心召されよ。

(なかがわ としかつ 〒335 蕨市北町1-13-10)

【訂正】

寄せ蛾記59号 pp. 1103-1104 小堀文彦：北本市でウスイロコノマチョウを採集

(誤) (正)

p. 1103 本文の12行目 台風20号 ⇒ 台風19号

(小堀文彦)

.....

音楽の中の虫たち（2）

碓井 徹

.....

前回、「トンボを扱った曲はこの1曲だけかも知れない」などと書きつつ、北欧の作曲家パルムグレンのピアノ独奏曲『Sudenkorento (The Dragonfly) op. 27 no. 3』を紹介したが、その後、トンボを扱った曲を2曲も見付けてしまった。

元来、“昆虫を題材にしたクラシック音楽”を集めるというこの趣味は、それほど熱中しているものではなく、楽譜やLPを買いに行ったついでに少し注意して探してみる程度のものでしかなかったので、この連載を始める直前までは、集めた楽譜やLPなども未整理のまま部屋のアチコチに散らかったままになっていた。いざ、連載を始める決心してそれらの整理に着手してみると、すでに入手していたと思っていた曲の楽譜が見つからなかったり、CDを買い忘れていることに気がついたりで、このままでは連載もすぐに行き詰ってしまうことが明らかであった。このような中途半端な状態で連載を始めてしまったことを少々後悔しつつ散逸していた資料の整理を始めているところへ、強い味方現れた。次に挙げる本である。

作曲家別クラシックCD&LD総目録 1991年版 [レコード芸術] 編 音楽之友社。

変形B5版、800ページを越えるこの出版物は、タイトル通り、1990年12月現在で発売されているクラシック音楽のLP／CD／LDのすべての収録曲を作曲家別に整理したものである。同様の編集内容の冊子はこれまでにも本屋で何度か目にしたことはあったが、『ある程度以上の評価を得ている主なクラシック音楽のタイトルを総覧する』という目的にこれほど便利な資料はない、と確信した私は、早速この分厚い本の1ページ目から“虫の名前が出てくる曲名”を探し始めた。

連載を始める前にこの本の存在を知っていればナア、と思いつつ、この少々根気のいる作業を暇を見付けては続いていると、出てくる出てくる、これまで存在を知らなかった“虫の音楽”が。もちろん、この本に掲載されている曲は、『録音されている』ものだけなので、この作業で“虫の音楽”がすべてピックアップできた訳ではないが、予想以上の成果が上がったことは事実である。“トンボ”を扱った次の2曲も、この涙ぐましい(?)努力によって発見したものである。

Sibelius, J. J. C. (1865-1957) Seven Songs, op. 17 no. 5 "En slända" (The Dragonfly)

Strauss, Joseph (1827-1870) Die Libelle (Polka Mazur) op. 204

この2曲、北欧の代表的作曲家シベリウスによる歌曲『7つの歌』の第5曲は“トンボ”、ワルツ王ヨハン・シュトラウスII世の弟ヨーゼフ・シュトラウスの作曲したポルカ・マズルカ作品204番も曲名は“トンボ”。2曲ともCDはすぐに入手したものの、楽譜はヨーロッパでしか出版されておらず、現在注文中で9月には届くとのこと。楽譜が入手でき次第この連載にて詳しく紹介するつもりでいる。

さて、今回紹介するのは、ギター独奏のための『ノミの組曲』。8年ほど前に作曲され、数年前に出版されたできたてホヤホヤ?の曲である。

◆ Suite de las Pulgas (Suite of the Fleas: ノミの組曲)

a Miguel Alcázar

SUITE DE LAS PULGAS
(Suite of the Fleas)

I LA PULGA SOÑADORA

Edited and fingered
by M. Alcázar

(The dreaming flea)

ENRIQUE SANTOS

$\text{♪} = 160$

IV LA PULGA ENAMORADA

(The flea in love)

$\text{♩} = 50$

◇ 作曲: ENRIQUE SANTOS (生年等 不明)

◇ 楽譜: Suite de las Pulgas (Suite of the Fleas), TECLA EDITIONS, London TE47

◇ 録音: 現在までのところ未録音と思われる。

☆【作品について】作曲者ENRIQUE SANTOSについては、楽譜に記されている緒言にも何も書かれておらず、メキシコ人であろうと思われること以外、一切不明である。緒言によれば、この組曲は、1983年に作曲され、1984年10月11日にメキシコシティにて初演されている。曲は6つの小曲からなり、それぞれ、I. The dreaming flea II. The big flea III. The dancing flea IV. The flea in love V. The difficult flea VI. The last flea というタイトルがついている。第5曲は、“苦境に陥ったノミ”といった意味らしい。上掲の楽譜は、第1曲“夢見るノミ”と、第4曲“恋するノミ”的最初の部分。楽譜の発行は1985年、東京目白のギタルラ社にて入手した。

寄せ蛾記 60号 目次

井 上 寛：いるま蛾報（6）	1121
石塚 祖法：武藏野の雑木林の衰退と蝶の変遷（1）	1124
玉木 長寿：埼玉県の興味ある双翅類（1）	1135
中川 利勝：「チョウ類憐みの令症候群」蔓延す	1143
訂正1件	1149
碓井 徹：音楽の中の虫たち（2）	1150
会 報	1152